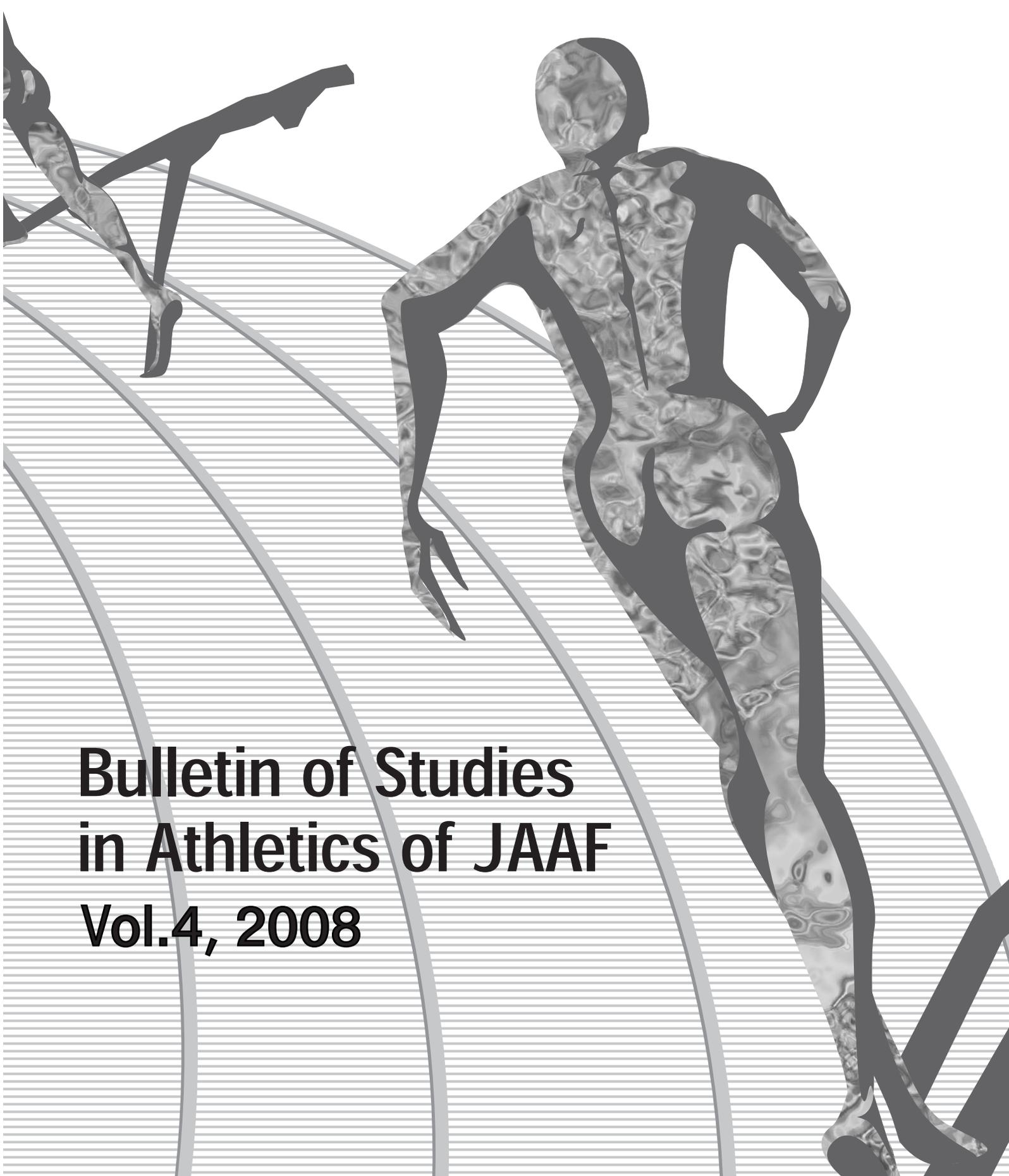


JAAF

財団法人日本陸上競技連盟
ISSN1349-7596

陸上競技研究紀要



**Bulletin of Studies
in Athletics of JAAF
Vol.4, 2008**

「陸上競技研究紀要」

(Bulletin of Studies in Athletics of JAAF)

投稿規定

陸上競技研究紀要編集委員会

1. 投稿資格について

本紀要に投稿できるのは、原則として(財)日本陸上競技連盟登記登録者(例:公認コーチなど)とするが、それ以外でも編集委員会が認めた場合には投稿することができる。

2. 投稿内容および種類について

投稿内容は陸上競技についての理論と実践に関するもので、内容に応じて、総説、原著、購読紹介(外国文献の紹介など)、資料、指導法および指導記録の紹介などに分類される。スタイルは和文、英文のどちらでもよい。

総説および原著には英文のタイトル、著者、所属、要約(150語以内)をつける。

(注:何らかの理由で英文要約等の作成が困難な場合は、編集委員会にその旨をご相談ください。)

3. 採否等について

原稿は査読を行い、査読結果をもとに採否および掲載順序の決定、校正などは編集委員会が行う。

4. 原稿の書き方について

原稿は原則として、ワードプロセッサで作成する。本文は、横42文字×縦38字で1頁とする。(1頁は約1600字、刷り上がり10頁以内、図表もその頁数に含む、すべて白黒にて作成)

英文は、A4サイズタイプ用紙を使用し、15枚以内を原則とする。

計量単位は、原則として国際単位系(m, kg, secなど)とする。

5. 文献の書き方について

本文中の文献は、著者(発行年)という形式で表記する。

例) 田中(1996)は _____

文献は、原則として、本文最後に著者名のABC順で記載する。書誌データの記載方法は、

著者名(発行年) 論文名, 誌名, 巻(号), ページの順とする。

例) 吉原 礼, 武田 理, 小山宏之, 阿江通良(2006) 女子棒高跳選手の跳躍動作のバイオメカニクス的分析. 陸上競技研究紀要, 2: 58-64.

伊藤 宏(1992) 陸上競技の発育・発達. 陸上競技指導教本—基礎理論編—. 日本陸上競技連盟編, 大修館書店, 55-72.

同一著者, 同発行年の文献を複数引用した場合は発行年の後にa, b, cをつける。

例) 田中ら(1996 b)は, _____

6. 原稿の提出先

投稿原稿(本文, 図表など)は、下記へE-mailの添付資料として送付するとともに、プリントしたもの1部を郵送する。

〒150-8050

東京都渋谷区神南1-1-1 岸記念体育会館内

日本陸上競技連盟

「陸上競技研究紀要」編集委員会宛

(Tel 03-3481-2300 Fax 03-3481-2449)

E-mail: kiyou@rikuren.or.jp

7. 原稿の締め切り

原稿の締め切りは、1月15日とし、発刊はその年度の3月末日とする。

8. その他

掲載者には、「陸上競技研究紀要」10部を寄贈する。

問い合わせ先:

〒244-8529 静岡市大谷836

静岡大学教育学部 保健体育講座

伊藤 宏(普及委員会調査研究担当)

Tel 及び Fax 054-238-4668

E-mail: ehhitou@ipc.shizuoka.ac.jp

あ い さ つ

(財) 日本陸上競技連盟
専務理事 澤木 啓祐

陸上競技に関する研究は本連盟の主要な事業のひとつであるが、普及委員会が主体となって発行していた「陸上競技紀要」と科学委員会が発行していた「陸上競技の医科学サポート研究 REPORT」を一冊にまとめた本誌「陸上競技研究紀要」は、各方面での調査・研究の成果を蓄積する重要な役割を担っている。

オリンピックイヤーである今年の年頭、我が国におけるトップレベル競技者の国際競技力の総合的な向上を図るトレーニング施設としてナショナルトレーニングセンターが開所した。このような施設はスポーツに携わる我々が長年待望していたものであり、本連盟としても強化・医科学の拠点を置いて活動し、オリンピックに臨む選手の多くが事前の調整にも活用した。

さて、今や医科学的データに基づく調査・分析・フィードバックの循環は競技力向上にとって不可欠であり、素晴らしい「施設の設置」とともに、今後は競技者、指導者、医科学研究者がより「連携を密接」とすることにより、最大の成果へと結実することを願っている。

今回第4巻目の発刊となった本誌には、投稿論文4編（原著論文：3編、資料報告：1編）、医科学サポート研究報告14編が掲載されているが、本誌が陸上競技の指導・研究に携わっている皆様にとっての一助となり、また広く陸上競技の発展に寄与するものとなれば幸いである。

陸上競技研究紀要

Bulletin of Studies in Athletics of JAAF

Vol.4 2008

目 次

【原著論文】

日本ジュニア走幅跳選手の助走における視覚コントロールが
助走の正確性とパフォーマンスに及ぼす影響 大村一光ほか . . . 1

「第11回 IAAF 世界陸上競技選手権大阪大会」における日本代表選手・群（団）
ならびに優勝者・群における「記録達成率（実力発揮度）」についての考察
. 岡野 進 . . . 10

全国小学生陸上競技交流大会に参加した小学生競技者の競技運営に対する
満足度・改善度について（その2） 阿保雅行ほか . . . 26

【資料報告】

第23回全国小学生陸上競技交流大会に出場した優秀選手の
身体的・心理的側面と疾走能力について 伊藤 宏ほか . . . 34

【日本陸連科学委員会研究報告 第7巻（2008）陸上競技の医科学サポート研究 REPORT2007】
. 43